
北風時々太陽

縛守神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

北風時々太陽

【Nコード】

N3267H

【作者名】

縛守神

【あらすじ】

大人しい少年と快活な少年。社会に出れば決して巡り合わなかっただろう二人は、同じ高校の同じクラスで三年間を共にした。性格も友達も部活も全く違う二人の数少ない共通点が、一人の少女……。誰も彼女が泣いた姿を見たことが無いという……。の人生を狂わす

第0章 プロローグ（前書き）

初の投稿です。

至らない点がすごく多いと思いますが

広めの心で読んでくださいorz

あと。。作者は書いてるうちに気持ちガクガク変わりやすいので、あらずじと内容が変わってくるかもしれません、すみません汗

第0章 プロローグ

プロローグ

「僕は君の強いところに惚れたって、言ってたよね。」

彼女は僕の目を見て、それがどうしたの？と声にせず先を促した。

「でも、たまには頼って欲しかった。」

顔が火照るのが分かった。こんなセリフ僕らしくない。

彼女はやはり無言で・・・。けど少し微笑んだ。

沈黙が生まれる。

そしてそれに、僕は苦笑いせずにいられなくなる。

彼女はそれを見て、待ってましたとばかりに口を開いた。

「それなりに・・・楽しかった。ありがとう。」

哀しみと感謝を同時に表そうとすると、きつとこんな顔になるのだろう。

そんなことを考える僕の頭には、彼女の、「それなりに・・・」という言葉が痛く突き刺さった。

「こんな時に、涙目で可愛く見つめることが出来たなら、こんな結末を先伸ばすことも、出来るんだろうね。」

哀しそうに微笑む彼女は、やはり泣いてはいない。

それを見て、やはり絶望的な気持ちになる。

「僕じゃ、力にはなれなかったか・・・。ごめん。」

「うつん。こっちこそ、変なことに付き合わせちゃった。」

反省の影をそっと背負った彼女は、本当にありがとう。と言葉を遺し、僕のもとから去っていった。

記憶は廻る。
記憶を巡る。

第一章

第一章

カタン。

金属音の静かにぶつかる音に、重い瞼を開く。眩しさが目にしみた。カーテンの隙間から零れる陽の光は、既に斜め上からさしている。

「何だ。もう朝か。」

あの音に目を覚ました他の誰かの声が聞こえる。

「いや、もう昼みたいだ。」

それに答えるのが先か、彼のうめき声が先か。

「いたっ」

という苦痛に耐える声が聞こえてきた。声の犯人は立ち上がったばかりの姿勢で、頭を押さえている。つい昨日の飲み過ぎが祟ったか、二日酔いに顔をしかめているのがここからでも分かる。

彼が苦しんでいるという事は当然、昨日行動を共にした自分にもそれは襲いかかるということだ。そう考えると、急に吐き気が出てくる。

「次からはもつと気を付けて飲まないと。」

誰に言うでもなく発した言葉だったが、それに彼は応える。

「それ、毎回言っつて、毎回忘れてるだろ、俺達。」

「ごもつともだ。」

苦笑する自分を横目に彼は今しがた取りに行ったのだろう、氷水を喉に通した。

「ぶはあ。」

その気持ちよさそうな声に羨望の気持ちを向けながら、相手に腕を指しのばす。

「俺にも。」

そう言ったら彼は持っていた氷水を渡すふりして、指先にちょん

と付けて直ぐに自分の口に運び直した。キンキンに冷えたコップが触れた指先を、驚いて自分に寄せる。

「いじわる。」

なるべく恨めしそうに聞こえるように言っただつた。が、彼には通じない。

「やらないよ。いい加減自分で起き上がれば良いだろう。」

と、横になったままの俺の脇腹を足で小突いた。こしょごつたさが襲い掛かり、体を少しくねらせたら、彼は意地悪そうにケラケラ笑った。

「いやだ。今から二度寝しようと思ってるんだから。」

予想通り、その言葉に彼は顔をしかめ、じゃあ早く寝るよと促した。そして

「お前の言葉は二日酔いに響く。」

と呟く。だが、その声は耳を通り抜けるだけだった。意識は全く別のところにあり、その結果が、大声を出すのに至った。

「そうだ！」

そして言っただとで、自分で深い後悔をする羽目になった。二日酔いでふにやふにやになった頭には刺激の強過ぎる音だった。

「だから、叫ぶなよ。頭痛い。」

相手も同じ現象に陥っていた。

「悪い。」

「で、何が、『そう』なんだ？」

「ポストに、何か来たの聞こえただろ？」

先ほどの金属音は、確実に玄関のポストに何か投函された音だった。

「…それで？」

少し怒りぎみの返答が来る。ほつといたらきつと、「そんなことのために大声出したのかよ」と怒鳴られるのだろつ。だからこそ口を開く。

「とつてきて。」

そう頼んだ。…案の定、

「自分で行け。」

と怒鳴られた。折角落ち付きかけた頭痛も、二人の元に帰って来た。

ポストに入っていたのは一通の封筒だった。宛先のところには、上手いとは言えない丸っこい字体で、

北岡 陽 様

と書かれていた。

「先輩宛だ。」

あまりにも意外で、無意識に呟いた。

それに彼も意外そうな顔で、

「先輩って・・・北岡先輩宛!？」

と、大袈裟な反応をした。

それ以外誰が居るんだよ。という突っ込みは置いておいて…。未だに横で寝息を立てる、同居人・北岡陽に目を向ける。

口をぽかりと開けたアホ面で眠る、北岡陽は、自分が知る限りでは、決して人付き合いの良い方ではなかった。

北岡陽の家に転がり込んでからおよそ一年が経つ。早く親元を離れて一人暮らしをしたいという一心で県外の大学を受験したところまでは良かったものの、国立大学は不合格。金のかかる私立への進学が決まった。それで無くても不況が続き家計は火の車寸前だというのに、高校三年間を遊び通して過ごした息子に遣る金はない。と父親がキレ、母親もまた隣で静かに頷いた。かと言って、エリート志向の両親は息子が高卒という烙印を背負うのを嫌がり、かくして学費は払ってもらったものになったものの、独り暮らしのための費用や小遣いは一切貰えないことになってしまった。

だが、高校生の持ち合わせる全財産なんてほんの僅かなモノに過ぎない。どうやって暮らしていくべきか悩んでいたところを、高校の悪友・高野晋平に助けられた。大学は違えど、二人の進学する大学は、互いに近くに位置していた。

「北岡先輩覚えてる？あの人もあそこら辺の大学行ってるはずなんだ。」

そう言うって不敵な笑みを浮かべる彼に、思わず自分も笑っていた。突然の押しかけに、彼は非常に困った顔を見せた。だが、青春を共にした部活の後輩を―それも、荷物をいっぱいに詰め込んだトラックを持って、あなたしか頼る人がいないんですと言いたげな眼を向ける二人の後輩を、押し帰すほど冷徹な心を、彼は持ち合わせていなかった。

「入れよ・・・汚いけど。」

そういつてさっさと部屋の中に入って行つた北岡陽はきつと、顔を見合せてニヤけた自分たちのことを見ていないだろう。

彼の部屋は2DKのトイレ・風呂付だったから、大学生三人が何とか暮らしていけるほどのスペースはあった。物置状態だった一部屋を綺麗に片づけ、二人に分け与えてくれたのは、最初の大学の講義に出て、帰ってきた日だった。金の無いことを伝えると、家賃全体の三分の一を二人で払えば良いと、彼は言い残し、そそくさとバイト先に出掛けて行つた。

優しい先輩ではあるのだ。ただ、彼を良く知らない人は皆、口をそろえて、近寄りがたい人。ぶつきらぼう。と、その印象を語る。大会の打ち上げに行つても、彼は皆を盛り上げる部長の横で、楽しそうな雰囲気を感じながら眺めているだけだった。人柄の良さから、熱情家の部長には好かれていたし、その部長のことを信頼していた同学年の部員からもそれなりの信頼を得ていたものの、自分を含む後輩一同は、彼のことを見下していた。彼の部活での活躍ぶりを見るまでは。

GK。それが北岡陽のサッカー部内での肩書だった。普段は栄えないその性格も、一たびグラウンドに立てば、強豪校がマークを張る要注意人物になった。人づきあいが悪いから、どんな人物なのか分からない。分からないから、試合の対策も立てられない。そう、これこそが、彼の技術を際立たせる、強さだったのかもしれない。

兎にも角にも、自ら進んでつるむような人ではなかった。だから彼の家に転がり込んで一年。彼宛ての手紙―同窓会のお報告や年賀状、DMなどを除いた、『私的』な手紙を見たのは、今回が初めてだった。

第二章

真夏の日差しは容赦なく照り続いた。

「暑い。」

一言ぽつりと言うと、晋平はグラウンド整備用のトンボを放り投げ、日陰に蹲った。コンクリートの地面には髪からたれる汗が落ちて、黒い染みを作った。はて、どうして自分はこんな辛い思いをしてまでサッカーを続けてるのだろうか。シミが増えるたびにその疑念は深まっていくばかりだった。そして、やめよう、退部しよう。という思考が安易に広がってきた。小中学校通したって、一番長く続いた部活は一年に満たない。ソフトボール、水泳、陸上、バスケ、バレー、テニス・・・ありとあらゆるものに挑戦して、ありとあらゆるものに飽きてきた。それは挫折では無い。スポーツという言葉にはとてつもない憧れと、何か、説明しきれない信仰心を感じるのだが、個々のものに絞ってしまえば、それは忽ちいとも簡単に手に入るもの。になっちゃった。運動神経の良い人という言葉だけで彼を説明できるほど、生半可な運動能力の高さではない。もし神様がいるのならば、運動の出来る人を作ろうと思っただのだろうと、周りの誰もが口にした。そして、それを皆羨ましがった。けれど、それなりの苦痛を確かに味わってきた。

父の影響で野球が好きになった小学校時代。高学年になったら部活動ができるらしいよ、なんていう噂を聞いた瞬間から、野球部に入るかと考えていた。野球部がないと知った時は、本当にショックだった。けど少しでも近いものをやろうと、ソフトボール部に入り、懸命に練習をした。「努力すれば結果は嘘を吐かないんだ」という顧問の先生の言葉を真剣に信じて、練習に励んだ・・・それが、間違いだったということに気付かずに。

入部してから一ヶ月で、レギュラーに抜擢された。顧問による大抜擢だった。

毎朝誰よりも早く学校に来て走りこみをしていた6年生の先輩がいた。彼が、かわりに補欠にさせられた。

「先生。何で南野が補欠なんですか。」

一人喜びに浸る晋平を余所に、キャプテンが異議を申し立てた。冷たい声だった。キャプテンを見ると、こつちを睨む彼の瞳が視界に入った。冷たい瞳だった。

「当然だろう。上手い奴が選手になるのは。」

顧問もまた、冷たい声で返した。

見事に選手から補欠へ落とされた当の南野と呼ばれる少年が、俯いていた顔をあげた。

「先生、僕、先生に言われたとおり努力してきました。」

一言一言、訴えかけるように彼は言葉を口にした。汗なのか涙なのか、彼の顔には何筋もの流れた跡があった。

「南野、確かにお前は努力してきた。お前が朝走ってるのも、先生ちゃんと知ってるぞ。だけどな、お前、努力しても伸びないだろう。そういう奴のこと、何て言うか知ってるか？才能がないって言うんだ。効率が悪いんだな、要は。要領が悪いんだ。だから伸びない。そして要領の悪い奴は、どう頑張ったって、ずっと要領が悪いんだ。先生はお前のためを思ってお前を補欠にしたんだ。どうだ、これで現実がちゃんと見えただろう？もう諦める。おまえにソフトは向いていないんだ。だから今のうちに諦めるべきなんだ、お前は。」

顧問は、実に顧問らしからぬことを言った。それは小学校四年生にもわかる理不尽さだった。それに皆、呆気にと取られていた。少年南野だけが、それを直に受け止めさせられ、何かに耐えるように必死に空を睨んでいた。顧問はそれを見てふっと鼻で笑い、その場を立ち去った。顧問が見えなくなると、皆、魔法から解放されたみたいに我にかえった。そしてその、言いようのない怒りが全て、晋平に向けられた。言葉無き批判の始まりだった。

「くだらねえ。」

自ら入った回想から途中で抜け出すと、暑かった太陽はもっと暑

苦しく感じられて、退部しようという思考は、退部するんだという決意に近いものに変わっていた。

「くだらないだろう？」

横を見ると、サッカー部の部長がいつの間にか隣に立っていた。

「くだらないだろう？」

もう一度彼は言った。なにを考えてるのか分からない、不思議な視線で彼を捉えながら。晋平はそれに、何も言い返すことが出来なかった。返す言葉がまるで浮かんでこなかったのだ。

「でもな、お前は、そんな一時の感情で部活を辞めるのか？」

「・・・何で俺が部活辞めるの前提なんですか？」

今度は容易に今言うべき言葉が浮かんできてくれた。

「違うのか？違うわけないだろう？お前は運動神経良いからなあ。直ぐにそういう思考に走るんだろうな。」

凶星すぎて苦笑するしかなかった。

「まるで昔の俺みたいだよ。」

「先輩が？俺みたいだったんですか？」

「ああ。まあ、俺の場合はサッカーに限って天性の才能に恵まれてたらしいんだけどな。つまんなかったよ。中学からやってる奴等がいつぱいいるのに、入部して一ヶ月くらい経ったら、高校に入って初めてやり始めた俺が一番うまくなってるんだ。初めは、先輩からも同級生からも凄い凄いつて言われて良い気になってたけど、イライラしてくるんだよな、時間が経つにつれて。なんでこいつらこんなことも出来ねえの？なんでこんなことくらいで凄いつて言えんの？つて。馬鹿馬鹿しくなってきた。で、部活辞めてやろうかと思っただ。こんなんやってらんねえって思ったんだ。」

そういつて苦笑いをした。

「でも、先輩はこうやって続けてるじゃないですか。」

話の中盤あたりから浮かんできていた疑問を投げかける。

「俺の場合はさ、北岡のおかげかな。俺は、誰よりもドリブルが上手かったし、ヘディングだってコントロール能力だって飛距離だっ

て誰よりも優れてた。勿論北岡よりも。別にこれは俺の勘違いとか自惚れとかじゃなくって、本当にそうだったんだ。」

「分かりますよ。実際先輩上手いですもん。」

「そんなセリフ、自分より上手い奴に言われても嬉しくないんだけどなあ。」

はい、そうですね。なんて答えるわけにもいかないから一仮にそうしても彼は怒りそうになかったけど、先輩後輩の関係を晋平は壊したくなかった。先輩に嫌われることがいかに不都合なことかは、ソフト部時代に嫌と言うほど思い知らされた。

「かと言って、下手な人に言われても、言われ慣れてるから嬉しくないでしょう？」

と笑って返した。下手に否定しても逆効果だということも、晋平には分かっていた。

「まあな。」

そう言って静かに笑うと、彼はまた喋りだした。

「勿論、ゴールだって誰よりも多く決めた。レギュラーの先輩がGKでも、練習試合で戦った強豪校のエースだったGKを相手にしたときでも、蹴れば大体シュートが入った。だけど、北岡がGKの時は、どうしても点数入れられなかったんだ。それが当時の俺には・・・舞い上がりきってた俺には、どうしても納得いなくて、部活を辞めるに辞められなくなったんだな。」

「先輩が？先輩ほど上手い人が北岡先輩相手にシュート出来なかったんですか？」

そんなセリフが悪気もなくさらりと出してしまうほどに、一年生の間では北岡という先輩は甘く見られていた。彼がGKをしている姿を見たことはないが、ドリブルもヘディングもお世辞にも上手いと言える代物ではなかった。

「笑っちゃうだろ？そうだよ、あいつ相手にシュート決められなかった。たぶん、いくらお前でも無理だ。」

「はは、そんな。冗談言わないで下さいよ。だって、あの先輩、こ

「言うっちゃ失礼ですけど、上手いオーラなんて無いじゃないですか。」

「そうだよ。それが、あいつの才能なんだ、そしてそれが、敵に回すと一番怖い才能なんだ。あいつはさ、自分が上手いことに気づいてない。だから常に低姿勢なんだ。周りもそんなあいつを見て、あいつは下手なんだって思いこんじまう。だけど、G Kに関して言えば、あいつは最高のプレイヤーだよ。」

その時は、部長の言うことがいまいち良くわからなかった。人の立ち位置は決まっっていて、それぞれがそれぞれに見合ったオーラを出して、そうすることで気の合う奴を感じ取り、相手をこれからどう見ていくのか決めるのが、これまでの晋平にとってのコミュニケーション方法であり、常識であった。そして彼にとって北岡は、平凡人らしく居る、平凡人の中の平凡人に過ぎなかったのだ。

第三章

「手紙?・・・俺に!？」

寝起きの北岡が彼のマグカップに珈琲を注ぎ終わるのを待つて、僕は手紙を差し出した。手紙を受け取った北岡は、僕や晋平以上に大袈裟な反応をして封筒の裏を見た。

「送り主は、書いてなかったですよ。」そう言うと北岡は頷き、「そうみたいだな。」と呟いた。それから少し考える素振りを見せてから、封を破ろうとした手をマグカップの取っ手に添えた。

「開けないんですか？」

歯ブラシを銜えながら洗面所から出てきた晋平が、口の中に歯磨き粉をいっぱい含ませたまま言った。彼の口の動きに合わせて、泡が生き物のように、薄暗く狭い空間に散った。

「やめろよ、汚え。」

と文句を言ったが、彼は片目でこちらを窺っただけで、なんの反応もそれ以外は見せなかった。寝起きの晋平は、兎に角機嫌が悪いことは一年暮らして良く分っていたから、こちらもそれ以上は何も言わないことにした。

「いや、後から開けるさ。俺に手紙なんて珍しいからな。大事に読むことにするよ。」

後半部分は彼なりの冗談なのか、それとも本気で言っているのか、基本ネガティブな彼の苦笑からは読み取れなかった。

「それより晋平、お前昨日バイト無断で休んだろ?長谷川さんから留守電あったぞ。」

北岡は表情をコロッと替え、真剣な表情で晋平を見た。

独り暮らしを始めてから、何があったのか見当もつかないが、北岡は高校の時よりも遥かに、表情の変化に富んでいた。あの頃は、静かに笑うか痛々しい笑みを浮かべるか、愛想の無い無表情な顔をするか、だいたいそんな感じの表情しかなかった。人の目を真っ直

く見るなんて以ての外だった。そんな彼が、晋平の目をじっと見ている。

怖いものなんてない。と冗談半分で豪語する晋平も、彼の時折見せるその目には適わないようで、昨日僕を居酒屋に誘った時の口実を口にするべきかどうか、彼なりに慎重に考えているようだった。そして途中で何度か目を泳がせ、僕に助けを求めてきたが、それは一切無視しようと心に決めていたから、何も言わないでおいた。自業自得なのだ、こんなことになるのは。

晋平にばったり会ったのは昨日の夕方だった。昼過ぎに大学の講義が終わったから、同じ講義を取っていた生徒数人と、市内の図書館へレポートを仕上げに行っていた。生憎にも、通う大学の図書館はエアコンが壊れ、まだ春と言っても、あと2、3日もすれば夏が始まるであろう、このジメジメする季節に、あんな日当たりのいい場所ではやるにやれなかったのだ。空調の効いた図書館での作業は無駄話を挟みつつも順調に進み、そこを出たの時には17時を回っていた。どうせ皆暇なんだ、どこか行こうぜ。と誰かが言い出したのをきっかけに、そのまま近くの街を当てもなく歩くことにした。

CD屋の横を通りかかったとき、一人が声をあげた。

「そうだ、俺、買いたいCDあったんだ。寄って良い？」

どうせ皆暇だからぶらついているのだ。寄らない理由だって当然ない。それに正直、外は蒸し暑く嫌な汗が出始めていたから兎に角エアコンの効いている場所に入りたかった。故に我々はそのほんの数秒後には、あの薄い自動ドアをくぐり、肌寒いとも言えるくらいのその空間に入っていた。そこで偶然にも、晋平にあったのだ。なかなか広い店内だから、もし同じ時間に同じ店にいても、なかなか気付けずに終わってしまうことだって多かったのだが、今回は少し事情が違った。

僕が見たとき、晋平は「喧嘩」をしていた。この表現が誤解を招くようなら、言い直す必要があるだろう。晋平は、人を「殴っていた」のだ。我々が店内に入ったのとはほぼ同じタイミングで、店員が

それに気づき、乱暴な客を宥めに行くところだった。高校に入ってから引退するまでサッカーを続けていた彼の力は生半可ではなかったが、彼を止めに行った店員はもつと屈強な体つきをしていたため、あっさりと晋平は捕獲され、奥の事務所の方へと消えて行った。後に残った被害者の方の男性は、小柄で年も結構いつているパートらしき小母さんに連れられて、奥の事務所とは別の空間に入って行った。

目当てのCDを見つけた友達は、その騒動をチラチラ眺めながら、無事に購入していた。彼がレジを済ませると、「帰ろうぜ」と声をかけられたが、晋平のことが何かきがりだったので、それを断って、さようなら。と言って彼らとわかれた。

晋平の消えた事務所の扉には「STAFF ONLY」と書かれた赤い看板が掛けられており、その奥から何らかの物音を聞こうとしたが、何も聞こえなかった。それどころか別の客に変な目で見られたため、諦めて店内をうろついて、彼が出てくるのを待つことにした。

目についたのは洋楽のコーナーだった。中古のCDが入った安売り用のカートの中には、昔よくきいていたアーティストの曲やらなんやらが置いてあり、カートは錆びつき、商品にもうつすらと埃がかぶっていた。「E」とタグの付いたところから一枚のCDを取り出すと、そこには中学時代に飽きるほど眺めた歌詞カードと全く同じものがあつた。中学一年の時に買ったギターで散々に弾いた曲が何曲か入っていた。懐かしいとは思いつけれど、もう一度聞きたいという感情は湧かなかった。聴くことによって、中学時代の懐かしい思い出がよみがえることもあるが、それと同時に嫌な思い出も蘇る気がしてならなかったからだ。CDをカートの中に戻すと目に入っただのは新譜のコーナーだった。その中で一際目立っていたのが、随分前に出たはずのCDだった。最近映画化になったドラマの主題歌だった曲だ。映画化に合わせ新しくデザインも変え、商品にしたのだろう。業者側の、儲けようという魂胆が見え見えな宣伝

文句も掲げられている。結局のところ、社会は利益中心に回っているのだ、少なくとも、この平和な日本では。

小さな音を出して「STAFF ONLY」の扉が開いた。晋平を飲み込んでからおよそ一時間で、その扉は晋平を吐きだした。

晋平は先ほどと別の店員に連れられ俯き気味に出てきた。彼は丁寧に店員に頭を下げ、彼を物珍しそうに眺める他の客の視線から逃げるように、足早に店内を出て行った。慌ててその後を追いかける。「よう。」

と声をかけた。僕の顔を認識した彼は、驚きの表情をみせ、それから不味いものを見られたでとも言つような嫌そうな顔で、「何でいるんだよ。」とぶつきら棒に呟いた。明らかに面倒くさそうな声だった。

「何やってんだよ、人殴るだなんて。大学生にもなつてよ。」

とからかうと、彼の嫌そうな顔は余計に酷く歪んだ。

「そっから見えたのかよ。」

「まあな。で？何で？」

「しつこいな、お前は。もうちょっと俺をそつとしくとかいう優しげな心づかいはできねえのかよ。」

「お前、そんなの俺に求めてんの？」

「・・・俺が、ばかだった。」と言つて額を抑える彼の残念そうな顔が、その手の中で変化したのが捉えられた。彼は、一年前僕に北岡先輩のところへ行こうと提案して来た時と同じ表情で、つまりは新しいイタズラを思いついた悪がきのような顔を浮かべて、

「飲みに行こうぜ、お前のおごりで。面白い話があるんだ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3267h/>

北風時々太陽

2011年10月5日00時57分発行